



三方一両損

試し読み

昨日は過ぎつ、明日は知られず

小梅ばあさんの朝は早い。

明け六ツの鐘がゴンと鳴ったが早いのか、長屋の腰高障子をがらりと開けて、共同の井戸へ手水を使いに出る。

寒い冬などは、大きなくしゃみに小さく悪態を吐きながら釣瓶を手繰る。夏などは寝苦しいから、くしゃみやみなぞしようなものなら、寝不足気味の長屋連中から怒鳴り声が飛ぶが、「エエ、寝汚ねエ。とつと起きて商売に出やがれ。お天道様に申し訳ねエと思わねエか」と得意の悪態をさらりと吐いて、ざぶりと桶に水を溜める。

手際よく身仕舞いを整えると、長屋へ取って返し、鍋やら野菜やらを抱えると、どぶ板を挟んだ斜向かいの長屋へ出向く。

抱えてきた鍋を足元に置くと、小さく皺だらけになってしまった拳を振り上げて、腰高障子の棧をどんどん、と叩く。長屋連中が怒鳴るが、小梅ばあさんは何処吹く風。都合よく聞こえなかった振りをして、障子を叩きつづける。これを毎朝、その長屋の主が出てくるまで続けるのだ。

暫くすると、「婆ア、うるせエな。毎日朝っぱらから起こすンじゃアねエヨ。芯張りは止めてねエだろに……」とぶつぶつ文句を垂れながら、寝不足の顔で主が出てくる。酒を飲まないと物の役にも立たない事から、「チロリ医者」、または「チロリ」と言う通り名で知られるヤブ医者、小杉勘造だ。

「この老いばれに、立て付けの悪イ障子を開けさせようってエのかエ。この罰当たりが」そう言いながら、鍋をひよいと持ち上げると、主を押しつけるようにして、長屋へ入り込む。

「てめエンとは出てきたじゃねエかヨ」

酒臭い息を吐いて、大きなあくびを漏らしながらも、主は一言言わねば気が済まない。晩酌を過ぎたとは言え、寝たのは一刻前の事だ。当然ながらまだ眠り足りない。それを毎朝寝入りばなに起こされるのだから、堪ったものではない。

とは言え、文句を言いながら、主もまた寝てしまうのだから、偉そうに出来た義理では無いのだが。

そんな文句も他所に、小梅ばあさんは長屋のあちこちをうろつきながら、二拝二拍一拝を繰り返す。九尺二間の長屋のほとんどを占める薬種箆箭の上に小さく奉られた神棚、水瓶、長屋の四方、そして竈に伏し拝んでから、火打石を打つ。

婆さんが拍手を打つ度に、勘造は「うるせエ、うるせエ」と悪態を吐くが、それも小梅婆さんが竈に向かう頃には再び夢の中だ。

そんな調子で、小梅婆さんの一日は始まる。

七ツ頃になると、一番の薬取やら、患者やらがやってくる。もとより勘造は起きていない。急ぎの患者でない限り、小梅婆さんは待たせておき、薬取りの方から対応していく。

二日酔いの勘造が起きてくるのは、早くても八ツ半か昼時に近い。しかも起きてからもぐずぐずと寝床の中で、煙草を飲んだり茶碗酒を飲んだり。小梅婆さんは、薬を調合しながら、寝汚い勘造を時々蹴り飛ばす。

患者の方でも心得た物で、勘造の長屋の前に何時の間にか置かれていた床机に腰掛けて、てんでに待っているのだ。勘造の所へ行けば、顔見知りか居ると分かっている。患者でない者もぶらりぶらりと集まって来る。その内床机の上では、碁やら将棋やらが始まる。患者なのか、老人の集まりなのか。それもいつも通りの一日だった。

四ツになろうかと言うのんびりした午後。麗らかな日差しに温まった表通りは、少し華やいだ雰囲気だ。床机の上でも、暖かさというつらうつらとする者も出てくる。そんな穏やかな雰囲気を取り裂くように、十兵衛が走りこんできた。

「先生ヨウ、チヨイと番太ア見てやつつくンナ」

番太と聞いて、小梅婆さんは膝立ちになる。

「爺イ、手前エチツト待ってナ」

「へへ、チロリも流行って来やがったね」と擲い口の患者に、勘造は「オキヤガレ」と言い返しながら、傍においてあった茶碗から中身をちびりと飲んだ。当然茶碗酒である。

悪態の応酬をしている内に、町の者が戸板に番太を乗せて運んできた。その後には、堀井忠道と、町名主が続いた。

戸板から動かせず、仕方なく三和土へ降ろしてみると、番太はぼこぼこに殴られて、あちこちを腫らし、気を失っていた。

「アレサ、亮太！コレ、マア。何て姿に：」

止める間もなく、小梅婆さんは顔色をなくして三和土へ飛び降り、気を失っている番太に縋り付く。その声に驚いた患者達も、何事かと先を争って、小さな長屋の入り口から顔を覗かせる。

「コウ、亮太、亮太ヨウ。エエ、亮太エ」

いつになく取り乱す小梅婆さんを見たのは、初めてだろう。涙で声を詰まらせながら、番太を揺さぶる小梅婆さんを見て、暫く周りの者は呆然としていた。

気を取り直した勘造は小さく舌打ちをすると、小梅婆さんを押しつけ治療を始めた。

普段ならどんな酷い患者の姿を見ても、平然と勘造の手伝いをする小梅婆さんは、力なく三和土に座り込み、番太の足を擦りながら、「亮太、亮太」と泣き続けている。

「コウ、旦那。婆さんに酒でも飲ませて大人しくさせつくンねエ。邪魔だ」
忠道へそう言放ち、勘造は番太の着物を剥ぎ取り始める。忠道は手助けをかって出た町名主と、小梅を宥めすかしながら、とにかく座敷に上げる。治療を受けていた老人が、すかさずチロリの座っていた傍にあった茶碗酒を差し出す。

勘造は十兵衛に盥を差し出しながら「爺つつアン、釜の湯ざましがあらアナ。すまねエがコイツに一杯エ汲んでくん」と言う。

勘造の所で急患となれば、武士も患者もへったくれもない。

「何故エ、こんな事に：」

立て続けに三杯茶碗酒を飲み干した小梅が、涙を啜りながら呟く。

それを聞いた町名主が見たことを、話し始める。

それによると、中間奴の羽織を着た男二人に寄って集って殴られていたのだと言う。

「そうじゃアねエヨ。何で亮太がこんな目に遭わなけりやアならねエのか、ソイツを聞かせなナ」

焦れた小梅が、少し声を荒げて尋ねると、亮太を戸板に乗せて運んできた別の男が、そもそものいきさつから話し始めた。

二人の中間は、どうも酔っ払っていらしい。大通りを大声で喋りなが

ら、番太が木戸番の傍ら営む小間物屋の前を通りかかった。

そこで小さい子供に鼻紙を売る亮太を見掛けた。亮太がたどたどしい言葉でやり取りをするのを見て、中間が押い始めたのだ。

亮太は、そんな風に扱われるのは毎度のこと、気にもしていなかった。町の連中は、亮太のことをよく判っていたから、押いもしないし、もし他の町の者がそんな事をすれば、すぐに駆けつけて辞めさせるのが普通だ。仮に駆けつけて来られなくても、亮太にはどうすれば良いかよく判っていた。むきになれば更に扱われるし、気にしなければ相手が大抵飽きて去っていく。そもそも、亮太なぞをしつこく押して居られる程暇な人間などいないのだ。

所が、この二人の中間は違った。

亮太が相手にしないと判ると、更に因縁をつけ始めたのだ。亮太を突き飛ばしたり、小突いたりしていたが、仕舞いには、商品の棚を引つ繰り返し始めた。その時、亮太が吼えた。

亮太には、自分が扱っている品物がどんなに小さな、どんなにつまらない物でも、どれだけ大変な手間と時間が掛けられているのかを知っていた。その一つ一つの売り上げが、それを作った人間の稼ぎに、つまり命に繋がるとののだ。

何が目的だか知らないが、そんな大切な物をただ壊されたのでは、それを預かって売っている亮太の気持ちに許せない。

亮太は、目にいっぱい涙を浮かべ、雄たけびを上げながら闇雲に中間二人に突っ込み、体当たりをかました。もともと体格の良い亮太の事、中間は鞠のように転がって、地面に倒れこんだ。何事かと集まってきた町の連中が、それを見て、様を見ろとばかりに笑ったのが、彼らを余計に怒らせてしまったらしい。

しかも、それまで手向かいもしなかった亮太が、一転、猛反撃に出たのだ。それも気に触った中間達は、二人も起き上がると、亮太を一斉に襲って、更に亮太を痛めつけた。

途中で、町の連中が何人も止めに入ったが、その度に中間に殴られ蹴られた。

とんでもない事になったと思っただけだが、隣の自身番から、町名主まで

呼んできて、町名主が中間を宥めてやっとならしたのだと言う。

「何もしてない亮太が殴られたのかエ？中間たちはエ？」

そのまま、立ち去らせたと聞いて、小梅婆さんはいきり立った。

「堀井の旦那、その中間は知れてあるンだろウ？すぐにお縄にしておくれナ。エエ、お縄にしておくれヨ。亮太がそのままじゃア、あんまり可哀相じゃないかエ。ヨウ、旦那ヨウ」

中間を捕まえると言ひ募る小梅婆さんに、十兵衛も忠道も困った顔をした。

大名とは言え、財政難に陥っている大名が多い昨今、使用人の数を減らして何とか暮らしている有様だ。しかし、登城する際、役に就いた際などは石高に応じた供連れの体裁を整えなければならぬ。

したがって、最近では中間などの軽い者達は、市中の口入屋から紹介してもらい、季雇いで雇い入れているのが現状だ。

口入屋は、仕事を探しに来た者を身分の別なく扱うが、武士だった者は、仕官していなくても武士と言う気持ちのため、大抵口入屋に来る事は滅多にない。また、仕事の内容も大半が下働きが中心のため、使う側が使われる側になる、と言う事が耐えられないのだろう。概ね庶民層が口入屋に来る。

抛って、雇われ中間は、出が庶民である者たちがほとんどである。とはいえ、元は庶民でも、働いているのが大名の武家屋敷ならば、仮にも大名の家来なのだ。お目見え以上とはいえ、穢れ仕事の町奉行配下の忠道達は管轄外で手を出すことも出来ないのだ。

それを聞いた小梅婆さんは、忠道の帯を掴むと、激しく揺すりながら「エエ、何とお言いだエ？わちき達が殴られても、相手がお侍エだからお縄に出来ねエア笑わせるなイ。確かにわちき達なんぞお侍エからすりやア、儂いつまらねエ者だろうヨ。だからツてエも、わちき達もむざむざ貶められやアしめエヨ。そうならねエように居るのが旦那たちじゃアねエのかエエ？ヨウ。そうでなければア、何のための十手なんだエ？コレサ、何とか言ひねエ」

と激しく詰った。当時としては背の高い方の忠道の腰の辺りに、目一杯背伸びした小梅婆さんが張り付いている様は、子犬がじゃれ付いている様で、普通なら噴飯ものだったが誰も笑えなかつた。

しかし、実際与力、同心達はどちらかというと、町人層を管理する為に

いる役人であつて、町人層がお上に楯突く事が無いようにするのが仕事なのだ。楯突かせないために、彼らの中の争いを裁いたりする訳で、武士階級からの受けた無体を解決してやるのが仕事ではないのだ。

ただ、本来の仕事の意味がそうであっても、人としての忠道の気持ちは違ふ。お上に楯突く輩を輩出しないう、犯罪の予防に努めるというだけでなく、町の皆を助けたいと思つている。しかし、同心に求められている仕事はそうではない。その違いの間で忠道達は苦しみながらも日々勤めているのだ。

そう言う理由で、何も言い返せない忠道達に更に怒つた小梅婆さんは、勘造の長屋にあるものを手当たり次第に掴んで、投げつけ始めた。

さすがに大事な薬研を三和土に投げつけられて驚いた勘造が、小梅婆さんを羽交い絞めにして止めた。それでも尚口汚く罵り、暴れる小梅婆さんを何とか押さえ込みながら、忠道と十兵衛に出て行くように促した。



手当てが終わつても目を覚まさない番太は、そのまま勘造の所で療養することになった。小梅婆さんは、その後勘造が仕舞いの患者を看終わつても、番太の枕もとに座り込んだまま居た。が、何時の間にか居なくなつていた。

勘造は、いつも通り万年床に横になり、ちびりちびりと晩酌をやりながら、夜も更けたし自分の長屋に帰つたのだろう、と思つていた。

暫くしてふらりとやつてきた辰之進と一緒に飲んでみると、小梅婆さんがやつて来た。

「婆さん、久し振りだの。さア、一杯やらかしな」

辰之進が、勝手に水屋から茶碗を取り出しながら声を掛ける。狭い座敷には、辰之進が行きかけに頼んでおいた酒と肴が並べてある。

「さアさア、早速酒の匂いを嗅ぎ付けやがったな。相変わらず鼻が良いゼ」
勘造がいつもの通り悪態を付いたが、小梅婆さんは三和土に立つたままだ。

「一体エ、どうした。ヨウ、婆さん。コレサ」

小梅婆さんは、何も言わず、勘造に懐紙の包みを差し出した。

「なんだエ？」

辰之進が受け取って開いて見ると、二朱の小粒が二つ包まれていた。

「何の真似だエ。タダ酒を少しは遠慮する気になったか」

勘造が覗き込んで、訝しげに尋ねる。

「亮太の治療代だヨ」

「何故エ、お前エが払う。こいつア、町名主が払うはずだろう」

辰之進が尋ねたのも無理はない。番太郎は、町が雇う仕事なので、本来ならば、町名主が払うはずなのだ。しかも、吝で容易に金を出さない小梅婆さんだ。

「ナニ、町名主の代わりに払いに来たのサ。これでどうぞ良い薬を使ってやってくンねエ」

とだけ言つて、痛ましい表情で番太を見やると、大好きな酒も飲まずに、帰っていった。

「一体どうした訳だエ？」

辰之進は、小梅婆さんの後姿を見送りながら、勘造に尋ねた。

「オイラが知るかヨウ。あの婆ア、亮太が運び込まれたのを見て、真つ青サ。柄にもねエ、ガタガタ泣きだしてヨ。堀井の旦那が、亮太イ殴りやがった中間は捕まえられねエと言いやがったら、泣き喚いてそこいら中の物を掴んで、投げつけやがった。マア、あれは見ものだったサ」

「どうも腑に落ちねエの」

勘造の言葉を聞いて、辰之進は難しい顔をして考え込む。

「亮太と婆さん、何ぞ言われねエ訳でもあるンじヤアねエのかエ」

「それより、あの婆ア、手前エで落とし前でもつける気じヤアねエのかね」
勘造は、肴を頬張りながら「あのヨイヨイじヤア、どうせ返り討ちだろうがナ」と言う。

「ムム、それヨ」

辰之進がしかつめらしく唸った。どんな理由か、しかとは判らないが小梅婆さんにとつて、亮太はただの番太郎ではない。勘造の話の通りの動揺ぶりからすれば、ただの知り合いではない事も間違いない。だが問題はその事ではない。問題なのは、小梅婆さんが自分で仕返しを考えていると言ふ事だ。町人が、如何に雇われ中間でも、武士に手を出した事が明らかになれば、洒落ではなく雇い主に無礼討ちにされても文句は言えないのだ。さアさア、困った事になりヤアがった…。

予想通り、次の日から小梅婆さんは昼間に来なくなった。



辰之進たちが心配した通り、小梅婆さんは自分で仕返しをするつもりだった。勿論、無礼討ちにされる事など、端から判っている。つい悔し紛れに堀井忠道に八つ当たりしてしまつたが、町奉行では大名の家来を捕らえられない事も、十分に承知していたのだ。だが、小梅婆さんはその中間がどうしても許せなかつた。如何に亮太が少しばかり不自由だとて、ただ通りすがりに、乱暴して良い訳などない。

イヤ、それも本当は後付けの理由なのだ。

己の子を乱暴されて怒らない親が居るだろうか。ただ怒り狂つて当然ではないか。

小梅婆さんの身の内は、そうした怒りではちきれそうだったのだ。

身よりもない、老いた女の暇つぶしに、医者の手伝いをしていたが、今は亮太の仇討ちだ。

勘造の手伝いなど、二の次、三の次である。

小梅婆さんは当然のように、手伝いを放棄して江戸じゆうを歩き回る覚悟で長屋を出た。譬え千住豊島村だろうが向島だろうが、必ず探し出して、亮太の仇を討つてやらずに居れようか、と言う気持ちだったのだ。

小梅婆さんは、まず中間の立ち寄りそうな店を見つけることにした。

亮太を運んできた男たちの話によれば、亮太に暴行を加えた中間は酔っ払っていたらしい。また、木戸の外、つまり大通りを鉄砲洲の方から木挽町へ向かう明石橋の方へ向かつて通りがかった所で、亮太が目に入ったらしい。

であれば、中間たちが来た方向にある何処かの店で飲んで来たに違いない。

その日から、小梅婆さんは夕方となると木戸を出て、見つけた一杯飲み屋、煮売り屋、一膳飯屋などを片っ端から覗いていった。

店が綺麗で、何も臆するような所のない雰囲気のお店は端から無視した。通り掛かりに因縁を付ける位なら、店でも暴れている可能性がある。なら

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)